

セイアは紐のような
マイクロビキニを身につけていた。

布の面積は極端に少なく、少し動くだけで
股間の肉がはみ出している。

小柄で胸のほとんどのない体に、
あえてこの衣装を着せたギャップが、
正直なところ気に入っている。

「……参ったね。まさか、
こういったものを用意されるとは思わなかったよ」

セイアは苦言を呈しつつも、まんざらでもない様子で
体を少しよじる。紐がずれ、薄い陰部がはつきりと露わになる。

「動くだけで、こうなってしまう。
セクシーですまない、というべきなのかね？」

返事をする代わりに、
彼女の細い腰を掴んで押し倒した。

マイクロビキニの布を指でずらしたまま、
一気に奥まで挿入する。

「……んっ……
いきなり奥まで……。
少々、乱暴ではないかい？」

苦言を言いながらも、
彼女の腰はわずかに浮き、受け入れている。



正常位のまま、私は容赦なく腰を打ち付け始めた。

ぱんっ……ぱんっ……ぱんっ……!!

小柄なセイアの身体は、私の動きに合わせてベッドに沈み、跳ねる。

「……んっ……あっ……」

君……少しは、配慮というものを」

セイアは苦言を挟みながらも、声の端に甘い吐息を混ぜていた。

「ふふ……私の成熟した女性の魅力に、抑えがきかなくなっているのだろう?」

そう解釈しているらしい。私は答えず、たださらに深く、激しく突く。

その小さな体を好き放題に扱える感触が、私の射精感を急速に高めていく。



体勢を変え、
セイアを背面座位の形に据える。

両足を持ち上げ、
自分の上で激しく上下させた。

体が小さく軽いので、
オナホを扱っているのと
大差ない感覚だ。

「……ふっ……はあっ……
少し、羽目を外しすぎじゃないかい」

セイアは軽口で苦言を言いながらも、抵抗はしない。
そのまま奥まで突き入れ精を放った。

びゅるっ……！
びゅるるっ……！

熱い精液が、狭い膈内に勢いよく注ぎ込まれる。

射精後も硬いままのイチモツを、
セイアはゆっくりと締め付けてくる。

「……まだ、続けるのかい？ 構わないよ。
私の魅力が、君をそうさせているのだろうから」

私は答えず、再び腰を動かし始めた。





